

取材を通して漠然と感じたのは、終活を行う人に共通する意識は他人に迷惑をかけない美しい死に方をしたい、ということだ。この意識は死に際を美しくするという武士道の死生観と通じるものがあるのではないか。日本人は古来「死」を忌み汚いものと考えていた。それゆえだろうか、死んだ時のことを考えたくない、死について考えると死が近づくような気がするという終活に対する否定的意見がある。しかしながら、終活の根底にある他人に迷惑をかけることなく美しく死のうという意識は、過去の人にも現代の人にも共通する意識であろう。終活は死に際を美しくしたいという昔からある日本人の意識に沿ったものではないか。

しかし、終活においては生きることについて考えることも大切だ。今回、どの取材の場でも生きることについての話が出た。死について考えると、生きることについても考えざるを得なくなると実感した。美しく死ぬためには美しく生きることが不可欠だ。美しく死ぬための「終活」は、残された人生を美しく生きるための「終活」という一面も持っている。〇〇活というキャッチーな名前はついているものの、終活のように死とどのように向き合っていくべきか考えていくことは、今後、多死社会を迎え、子供や親せきなど看取る人がますます少なくなる日本において重要なことだろう。その第一歩として、終活という観点から向き合ってみてはどうだろうか。